

## 基礎領域研究「中世文学講読」由来―私的回想を兼ねて

荒木 浩

大学の内外で働くようになって、三〇年以上が過ぎた。時代はいつしか何周もめぐり、似て非なる風景のどこかで、迷子になってしまふこともしばしばだ。先日も、およそ文系とは無縁のとある大企業に勤める高校時代の友人から、「基礎的教養」や「人間力」の涵養を謳った「教養基礎講座」での講演を頼まれて驚いた。リベラルアーツ重視が会社の方針だという。

隔世の感がある。私が愛知の県立大学から大阪大学の教養部に転動した一九九二年は、前年のいわゆる大学設置基準の大綱化を承け、教養部廃止の嵐が吹き荒れていた。人文・社会・自然、外国語、体育という、高校の続きのようなものをまた二年間もやるの？せつかく大学に入ったのだから、早く専門がやりたい……。そんな学生の倦怠もさることながら、旧制高校の歴史を引きずる制度の中で、教える側にも、専門教育の学部との間に存する、教育対象と内容、また処遇などへの不満があった。ほとんどの大学で、あつという間に教養部がなくなっていく。そして大学院重点化へ。法人化につながる毒まんじゅう……。でもあったか。

大阪大学では、当初、教養部独立案が検討されたが、はやく一九七四年に、教養部から言語文化部が独立している。大綱化直前の平成元年（一九八九）には、言語文化研究科という大学院も設置され、二年後には博士課程も出来た。教養部に語学の教員はいない。教養学部としてジュニア、シニアを担当していた東大や、総合人間学部、人間・環境学の大学院を作った京大

とは状況が異なる。単独の学部化には限界があった。専門課程へ、という所属教員の希望もあり、いつしか教養部解体と教員の各学部分属が決まった。

当時の教養部は文字どおりの「教授」会で、赴任早々の助教授だった私には、出席の義務も権利もない。その代わり、若手だからとの理由で、教養部内の改組委員会、分属案が決まってからは文学部との協議会へ、と駆り出された。私が日文研へ転任する時の研究科長だった江川温氏、また日文研の小松和彦所長は、当時文学部側の委員であった。お二人とも助教授で、定期的な会合で議論を重ねた。今となっては懐かしい思い出である。教養部所属はわずか二年。九四年に文学部へ移籍となった。

教養部では「国文学」の通年科目を三コマか四コマ、年度ごとに、教授と交代で担当する。助教授には文学部への出講義務はない。「国文学会」という同窓会と、年にいくどかある卒論・修論発表会や学科旅行で文学部の国語国文学科に赴き、専門課程の学部生や院生と交流した。研究室は、イ号館という、阪大でもっとも古い建物の三階にあった。高台の上に立つ旧制浪速高等学校時代の歴史的建造物である。学部へ向かうときは、下界に降りる趣で、ちょっと愉快だった。後に大阪大学会館となり、今では阪大豊中キャンパスの顔である。

時には屋上（建物は五階建て）に上がる。そこはかつて国文学者の風巻景次郎が、昭和二六年（一九五二）一〇月一〇日付で、夫人へ「阪大（浪高）の屋上から見た大阪平野の美しさ——楽しんで居ります」と書き送った場所だ。ちなみに、その八年後、風巻が最後の講演を行ったのが、私の阪大の前任教、愛知県立大学（女専を経て当時は女子大）である（『風巻景次郎全集』所載の日記より）。

なぜこんな昔話を書いたかといえば、このイ号館屋上手前の五階の部屋で、教養部時代に開

いていた基礎ゼミが、日文研の基礎領域研究「中世文学講読」の源流だからである。教養部の担当科目は、講義の他に、国文学SⅠ（一年生対象）、同SⅡ（二年生対象）という基礎ゼミ科目があり、文系学部 of 学生と、少人数でゆったり古典作品を読むことが出来た。二年生のSⅡになると、かなり深い議論も出来る。文学部の専門課程に進んだ学生が来た時代もあったようだが、私の若く短い教養部在籍では、十分な貢献はできなかった。赴任の年の国文学SⅠでは『今昔物語集』を読んだ。当時の出席者の幾人かは、現在、東洋史や日本文学などの専門家として、大学の一線で活躍しておられる。ささやかな喜びである。

教養部の解体と前後して、研究室は、共通教育棟という、白い豆腐状の平凡で窮屈な設置基準下の建物へと遷った。科目名は変わったが、一、二年用の基礎ゼミ科目は継承され、九四年には「国文学講読SⅠ」という科目となる。かねてより興味があった『方丈記』の英訳を取り上げた。まだ語学を学んでいる学生さんには、訓読注的な精読より、英語と比較しながら、短編の名作『方丈記』を読むのがいいたらうと考えたのである。そこで鴨長明自筆という所伝の大福光寺本の影印本、翻刻と並べて、MS-DOSのコンピュータで入力した夏目漱石、南方熊楠の英訳を対比したプリントアウトを配り、テキストとした。

私の授業も下手だったのだろう。国文好きの学生は、あまり英語には興味がないらしく、登録は七名ほど。最後は二人の出席になった。もっとうまくやれたのではないか、という後悔が残った。

その後、大学院重点化で大学院専門科目の担当が増えたが、講義は、学部、修士、博士と合同でやることができた。私の中で『源氏物語』に関心が集中していた頃で、『源氏』の名前を掲げて講義をすると、専門課程なのに、大講義室がいっぱいになる。一方、留学生が増え、海

外の研究との連結のようなことがリアルになった。英語圏の研究のフォローが必要、という切実感もあり、研究会をやりませんか、と大学院生に慫慂されて、「英語論文を読む会」というのを隔週で開催することになった。The Kagero Diaryの解説文や、Inventing the Classics: Modernity, National Identity, and Japanese Literatureの諸編などから読み始めた。やってみると学生は予習がしんどそうなので、私が読んできて、ぼそぼそと解説する形式が定着した。ならばいっそ、講義として正式に開講しよう。そう考えてシラバスに上げたら、前年一〇〇人を超えていた受講者が、一〇分の一ほどになった。一八〇分の隔週開講にして、ゼミのような一年を過ごした。私の阪大での英語論文の講義は、それが最初で最後である。

愛知、大阪と過ごしてみても、どうも教育や講義は苦手だという意識が強くなったことも一因となり、現職に転任すると、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究という、長い名前の大学院があった。ネガティブではないが、ポジティブでもない関わりの中で三年が経ち、留学生としてゴウランガ・ブラダンさん（現日文献機関研究員）が在籍することになった。『方丈記』の英訳（夏目漱石他）を中心的な研究対象とする、という。私自身、二〇一二年の「方丈記八〇〇年」イベント（『方丈記』は建暦二年、西暦一二二二年に成立）への関わりもあった。『方丈記』をテーマとして、久しぶりにゼミ形式の授業をやってみようかと、「中世文学購読」という基礎領域研究を開始したのである。

古いファイルを開けて参照し、本文と英訳を交えながら『方丈記』を二年で読み上げた。『方丈記』のあとは『徒然草』に続けた。ちょうど拙著『徒然草への途―中世びとの心とことば』の整理をしていたところである。基礎ゼミなので、シニアの外国人研究者にはあえて声をかけず、関心を抱く方が、折々に参加する。外部からの受講者もあり、現在では五〜八人ほど。

阪大時代と同じく、隔週で開講している。二二〇分だが、しばしば延長して、三時間近くになることもある。毎週でないで継続性の担保が難しいが、一回ごとの燃焼度は高くなる気もする。基礎領域研究では、作品を読みながら、できるだけ毎回、自分の書いた新しい論文やエッセイを提示し、関連学会の情報など織り込みながら進めている。発表前の新ネタを話してみたり、話題の本があれば、取り上げたりもする。今年度は、二人の院生を迎え入れたこともあり、よりゼミに近づけ、大学院生の研究整理や発表、若手研究者の学会発表準備などを軸としている。継続して一作品を読むことは、ひとまずお休みだ。

もっとも、来年の春に『徒然草』をめぐる大きなシンポジウムがありそうなので、秋後半から来年度初めには、また『徒然草』ゼミが復活するかも知れない。『徒然草』は、小川剛生『兼好法師』（中公新書、二〇一七年一月）の刊行で、作者論に重大な問題提起がなされた。学界の外でも話題になり、教育界でも対応を迫られている。実は、元になった小川氏の論文は、二〇一四年に出ている。基礎領域研究「中世文学購読」では、小川論文が出てすぐに、その分析を行った。

そういう時には、中国ならすぐに専門家を集めて、議論を重ね、統一見解を出しますよ。日本ではしないのですか。そうおっしゃって、強いモチベーションを与えてくれたのは、滞在の一年間、毎回基礎領域研究に参加してくださった、南開大学の劉雨珍教授である。シンポジウムが実現すれば、期待に応えて、何とかいいものにしなければ、とご恩を受け止めている。

（国際日本文化研究センター教授）